

第31回日本緩和医療学会学術大会  
2026年6月19日(金)～6月20日(土)

ランチオンセミナー16 LS16

# 「希望」を処方する

アセトアミノフェンの最新情報と骨転移への集学的アプローチ

日時

6月20日(土) 12:15～13:05

会場

第7会場 福岡国際会議場 4F  
411+412

座長

荒尾 晴恵 先生

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻  
看護実践開発科学講座 教授

演者

余宮 きのみ 先生

広島市立広島市民病院 緩和ケア科 主任部長

※本会のランチオンセミナーは事前予約制です。

共催：第31回日本緩和医療学会学術大会/あゆみ製薬株式会社



# 「希望」を処方する

## アセトアミノフェンの最新情報と骨転移への集学的アプローチ

広島市立広島市民病院 緩和ケア科 主任部長

### 余宮 きのみ

がん疼痛治療におけるアセトアミノフェンの再評価と、骨転移に伴う体動時痛への集学的アプローチについて概説する。がん疼痛治療に対するアセトアミノフェンの利点としては、NSAIDsのような有害事象が少なく、オピオイドや鎮痛補助薬にみられる中枢神経系の副作用がない点が挙げられる。特に骨転移の体動時痛において、オピオイドの漫然とした増量は過鎮静を招く恐れがある。そのため、アセトアミノフェンなどの眠気を生じない鎮痛薬やリハビリテーション、ケアなどの集学的治療を組み合わせ、「痛くさせない、眠くさせない」ケアの両立が重要である。

また、アセトアミノフェンの強オピオイドへの上乘せ効果を検証した研究では、プラセボと比較して有意な鎮痛効果がないことが報告されているが、ここではプラセボ群もアセトアミノフェン群と同様に鎮痛効果が得られる点に着目したい。医療者との信頼関係や治療への期待感が鎮痛効果(プラセボ鎮痛)を増強させる生物学的背景にも触れ、患者に「希望」を処方する緩和ケアの真価について提案する。

一方、アセトアミノフェンの過量服用による中毒性の肝障害は広く知られているが、治療量での重篤な肝障害は極めて稀(0.1%未満~0.001%)であるとされる。また、ALT上昇の多くは一過性であり、適応(adaptation)が生じること、偽陽性であることも報告されている。鎮痛機序についても、TRPV1受容体や下行性疼痛抑制系への関与など、新たな知見が得られている。